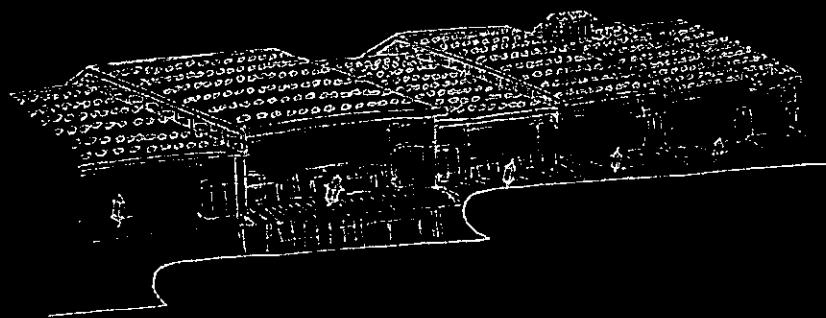


---

尾張町を支えた女たち その際

---

女町と尾張町の商人風情を振り返りながら



## 目 次

はじめに	1
初めて主計町に来たころ	2
船着き場としての母衣町界限	3
家並みの作りと女将たち	6
子供たちの遊び場となりながら	9
“化ける”ことで楽しむ遊びごとなど	11
四万六千日と主計町気質	13
托鉢の厳しさの中に三味線の音色を聞いて	16
尾張町の賑わいと旦那衆	17
浅野川の大氾濫に合って	19
伝統芸能を伝え残す町として	22
あとがき	25

## はじめに

“しぐさ”を真似ることから芸能が始まったとか。こころを純にして、ひたすら能く見詰めることで、1つでも多く自分の中に取り入れるモノを見つけ出そうとする熱意は、やがて人を楽しんでもらうために、創意工夫するようになります。けれど、道をどこまでも極めるには、より自分自身に厳しくするがために、孤独なこともあり得ることでしょう。

商売も、まずは見習うことから始まり、手真似足真似を通して、手まめ足まめに体を動かして覚えて行くことですから、基本に変わりはないようです。理屈(理論)よりも、まず行動する実績作りが大切なのです。

基本を繰り返し繰り返し、見直し、再発見する地味な根気強さがなければ、芸は高まりません。

これを商売の姿勢に置き換えると、“かたくなさ”とか“こだわり”に通じて行きます。ただ、ここでも注意しなければならないのは、決して肩肘張らず、人のところを感じ取り、お客様のところ持ちになる根気さを忘れないことです。

楽でなく苦しいこと、近回りでなく遠回りなこと、目先でなく先を見通すこと、と言えば恰好良い言葉ですが、一見すると損な方法のようです。

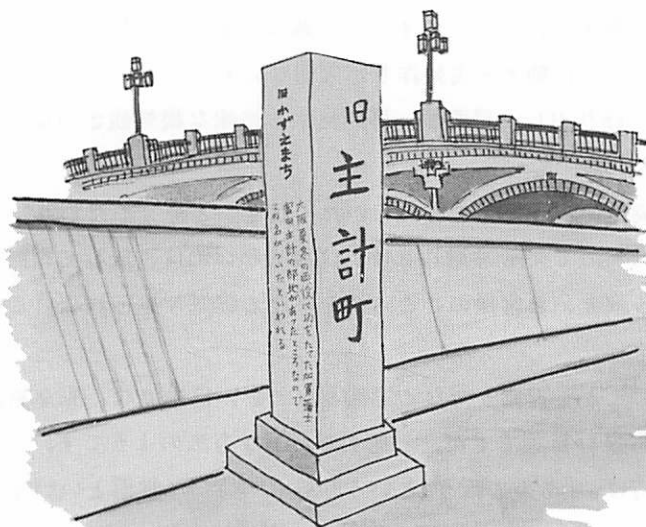
こうした生き方は、「あえて行う」という“粋(いき)”な覚悟といますか、純粹に“まじりけなく”、ころばえ豊かな心情と気概を持ち続ける姿勢につながります。

ともすれば、あまりに日常的なことに追われて、ころのゆとりを忘れがちなことを見直して見るべきではないでしょうか。

ちょうどそんな折、商人の姿のどこかに微妙に重なって来る世俗的な女町(おんなまち)からの、粋な響きを聞く機会に恵まれました。その女町の中にひっそりと居を構える、世間のしがらみとは別世界の尼僧の立場から、感性に訴えかけて来る言葉の中から、何かを感じてもらえれば幸いです。

初めて主計町(かずえまち)に来たころ

女町といわれる主計町の茶屋街に来たのは、21歳になった年(昭和3年)の雪の降る12月の日やった。通りは奇麗な桜並木で、浅野川の河原に向いて枝に雪が白く、ふんわりと載っていたのを覚える。近ごろでは雪も少なくなって、ちょっとアイソムナイ[物足りない]けど。



前の月には、昭和天皇の即位の大礼が行われたり、すぐその彦三町の大火焼け跡に彦三大通りや小橋通りが開通したばかりで、金沢の町はいつもの年よりも熱気を持った感じの師走だった。表通りは、尾張町の老舗がずらりと並んでいて、いやが上でも賑やかやった。

台湾で巡査をしていた父が亡くなって、3人兄弟の中で一人生き残って、母の里の富山に戻ってこのかた。6歳で頭を剃って尼僧の厳しい生活をして来た

私には、この町はまるで別世界のように見えたわ。

茶屋街の中の人ひとりがやっと通れるような細い小路を入ると、石コロだらけで木の一本もない処に、寂しく小さなお寺が待っていたのや。こんな場所にお寺があるなんて、びっくりや。なるほど、男さんがほとんど居らない町やもんで、ほとんど檀家もいなくて、代々の住職が居着かなかった人も頷ける。それに、回り中がおしろい臭い女ばかりでは、男の住職さんも落ち着かんかったやろし。

それでも、町としては住職のいないままのお寺では困るので、女の私に来て欲しいと話が掛かったんやね。幸いにもあのころから、女の身でも寺の住職になることが出来るようになったさかい。思い切って、主計町の料理屋・待合・芸者屋の協同組合のような“検番”から、電気代や屋根の修理代や人夫代を出すことにして。

何といっても源法院は、臨川山とも号して、浅野川に橋がまだなくて、渡し船で川を渡っていた時代に弘法大師が開いた寺だとの伝説とか、皇國地誌には“元和3年(1617)僧長浪開基建立す”と書かれる程の、由緒あるお寺だし。先ごろ(昭和45年)界限全部が尾張町の名になってしまいうたけど、藩士富田主計(とだかずえ)の屋敷があったところから付いた町の名や。それに、明治2年から続く茶屋街の由緒もあることだし。

富山でお世話になった隠居さんと一緒に私は、ともかく生活を始めたんや。まずご本尊様をキッチンと安置して、荒れ果てていた院内を掃除して、あちこちから吹き込む冷たい隙間を直すことが先決。やることは、どんだけでもあったわ。

#### 船着き場としての母衣町(ほろまち)界限

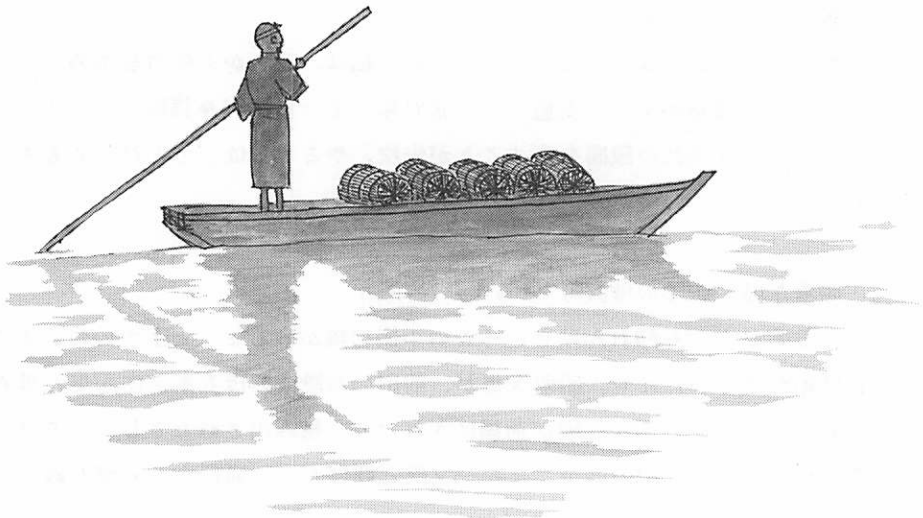
信じられんかも知れんけど、その小橋の橋からちょっと上手の付近まで、昔は船が来ていたんや。船着き場が、前田のお殿様の母衣衆が住んでた母衣町の処にあって、いろんな物が荷揚げされたり、積み出されたりして、そりゃ賑やかだったとか。中の橋が、まだ一文橋と呼ばれて、通行人から渡り銭として

一文を取っていたのも、このころに聞いている。

何しろ、ず〜っと昔、まだ前田のお殿様の時代は、今のように陸で物を運ぶよりも、海から物を運ぶ方が便利やったんや。一度にたくさん荷物を積み込むには、船が何んといっても重宝がられてたさかい。

それに、今のように鉄で造った船と違って、あのころは全部”木で造った船”やったもんで、船食い虫が木製の船にとっては一番の大敵。今のように対策が分かってないもんで、船を停める処を探す時は、船食い虫のいない真水の湾内でないといかんかった。下手に塩水の処でのんびり停まっていると、底が穴だらけになって使い物にならんようになるし、沈没させられるという最悪なこともあったし。

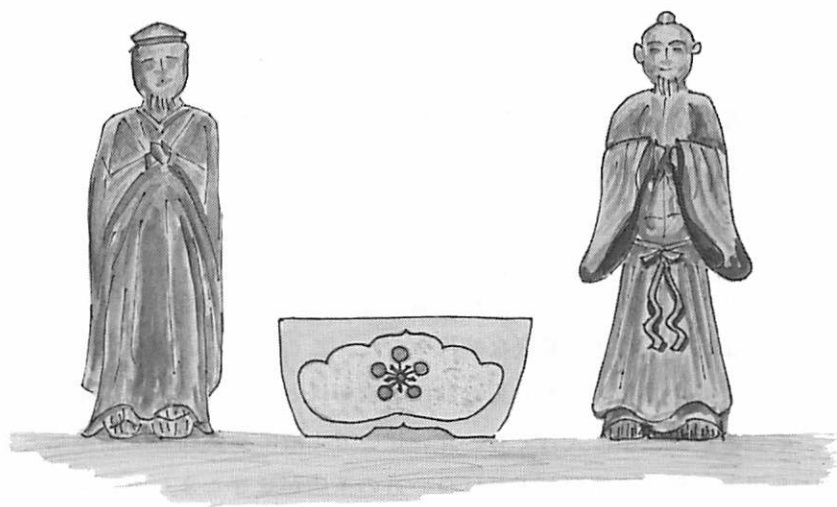
そやさかい[だから]、今の鉄製の船にとっての良い港と、昔の木製の船にとっての良い港は、まったく違うとったんやね。どちらかという、川の河口なんかは塩水が薄められるもんで、港として使われることが多かったみたい。昔は栄えてたけど、今は静かな港があるのも、そんなことらしいわ。



北前船が日本海を渡って、帆を休めるのは、大野から入って河北潟の真水の港に着いてから。船食い虫に船底を食べられる心配もなく、安心して荷物を川船に移して、堀川を通じた浅野川を上って来ると母衣町に着く訳や。

古くは麻野川といわれ、また風情を持って女川とか絹々川とかいわれてたさかい、船も入り易かったんやろね。もう一つの犀川は暴れ川で、男川ともいわれて始終洪水があって、片側にしか町並が揃わなかったそうなの。

人と物が群れ集まる処には市場が立つし、人を接待する女性も集まって来るのが自然やわね。今の主計町の茶屋街も、初めはこの母衣町付近に出来て、だんだん今の処に移って来たのや。



旅立つ人、旅から帰る人。今と違って交通機関もそうそう便利になっとらんし、本当に水盃で別れを惜しむ位やったとか。旅先での無事平穩を祈ったり、無事に帰れたことを感謝するのに、この寺はまさに打って付けの処にあったん

やろね。お御堂に、梅鉢の紋があるのも何んとなく領けるわ。

そういえば、物の本に、ずっと昔の一向一揆のころには、山崎村凹市(くばいち)と呼ばれる金沢で最初の市が立ったのもこの辺になるとか、書かれていたね。

この山崎村凹市にあやかって、橋場町界限が懸造り(かけづくり)と呼ばれて繁盛したのも、崖造り(かけづくり)と別な言い方もあるように、水の上や崖の上に建物を張り出して建てた始まりかららしい。誰の土地でもないから、元手を気にせず気軽に商売を始められたんやろう。またそれまでの仕方にこだわらず、古着を店先に掛けて外から店内を見えるようにして、道行く人が店員に気兼ねすることなく、ひやかしを出来るようにしたのや。

今のように冷房なんて便利なものがなかったさかい、金沢のように夏の蒸し暑い処では、涼しさと呼ぶにも具合よかったやろうし。

近くにある久保市というお宮さんも、名前のゴロからいうと何か関係があるんやろね。明治元年に神仏混淆が禁止されて、久保市さんは不動山の剣をご神体として神社になったし、源法院は不動明王の本体を戴いて仏寺となったさかい、まんざら無関係でもないんやけど。

#### 家並の作りと女将(おかみ)たち

昭和の入りかけのあのころは、板屋根の上に石を置く家屋が、金沢の半分位で、瓦屋根なんてまだまだ贅沢な時代やった。ここの町も、つましく急な傾きのある板屋根の二間(3.6m)程の間口の家がほとんどで、大きな家は数えるほど。そやさかい、中に入っても、せいぜいで1階に6畳間が2部屋くらいと、2階に8畳と4畳半の座敷があれば良い方の茶店がせせこましく軒を並べてたね。

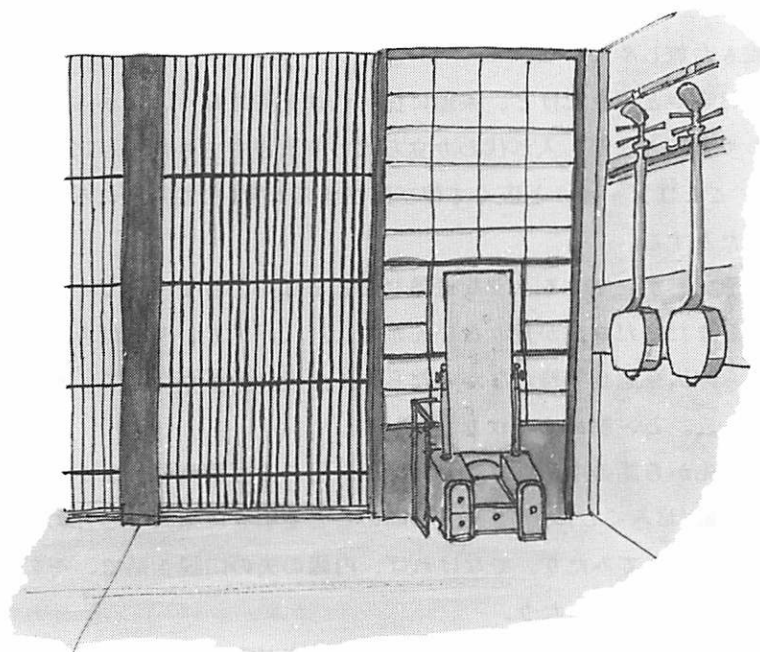
ちょっと表の尾張町通りを振り返ると、さすがに老舗の町や。屋根は、冬の雪も滑り落ち易い瓦屋根で鈍く光っていて、それぞれの店の間口も五間や十間は優にあったね。えらい違うもんやわ。

茶屋の数を数えると、あれで50軒ほどやったかね。一番小橋寄りの処には、



白木で作った大きな演舞場というか主計町検番があって。確か、回り舞台もあるほどの立派なものやった。芸妓さんは、ざっと100人はいたはずや。

その綺麗な芸妓さんを、格子越しに道から覗けるようになっていて、薄暗くなると男衆が通りをぶらぶらと歩くんやわ。昼間の仕事が一段落してから、この町並を歩いていると、気が休まるんかね。



茶屋の表向きは、お客さんを迎えるためにそりゃ綺麗になっとる。けど、店の中は案外に質素で、儉約をしてるんや。ただでさえ狭い店の中で、箆笥やら何やらを置くと、もう人の居る処もない程になる。鏡台も細長くて場所を取らんように工夫してあるし、お銚子なんかも、細長い茶棚の中を開けるときっちり詰まって並んでいる位や。よく、こんな息苦しい処に上手に何んでもかんでも納めてあるもんやと、感心する。

そやさかい、芸妓さんの眠る場所なんてほとんどある訳ない。お客さんが付

いている間はお座敷に上られるけど、普段は猫のように丸まって、それこそ台所か押し入れの中にも入らないかん程や。

風呂もあるはずがなく、川向かいの風呂屋へ行ってたね。夏は、河原で涼みながらの浴衣姿で、カラコロと下駄を鳴らしながら橋を渡りながら、のんびりと悠長な気持で風呂桶を持って行けるけど。寒い冬の日なんかは、湯冷めをしないようにするのが大変やったんや。せっかく暖ったまった体が、顔といわず手先といわず、たちまちバリバリに凍るようになってしまう。これではせっかくの美貌も台無しやわいね。

小さなお寺やと思うたけど、茶屋に比べれば天井も高く、広かったんやね。女将たちや芸妓さんが、入れ代わり立ち代わり真夜中でも話をしに来たりして、「ああ〜、ここはスッキリと広くて伸び伸びするわ」なんて言われると、あれっ！と感じたりする。

私の人徳で集まってくるような殊勝なことではなく、ちょっとガッカリさせられるけど。まだまだ修業が足りないんかね.....。尤も、やっぱり心の奥底に、どこかしら神仏を思う気持がなかったら、この寺にわざわざ来てくれるはずがないし.....。と、慰めてみたり。

そう思う先から話の中身は、人の噂話や、男の人と別れるべきかどうかばかり。御神籤(おみくじ)で男さんとの間のことを引きに来たりしたので、さすがに窘(たしな)めてみたり。でなければ、内縁の夫の口説き話で、その人が、大きな老舗問屋の人やったり。

切りもなく相槌を打っていると、聞いている方が疲れてくるし、一緒に住んでいる年寄りの隠居さんなんかはそれで参ってしまった程や。そやさかい、隠居さんが亡くなってからは、10時になると戸を閉めるようにしたわ。

ただ、芸事に関しては熱心やったね。検番でお師匠さんに付いて、熱心に稽古して、“流れ”なんていって、他の廓というか茶屋とは違うんやとの気風があったね。夜が遅くて眠いやろうに、昼のさ中に三味線(しゃみせん)の音色や清元の声、踊りの掛け声が風に乗って聞こえて来るほどやったし。

## 子供たちの遊び場となりながら

お寺は、少し高台の処に建てていたせいもあって、戸を開けるとすぐそこに、お客の姿が見えてしまうもんで、慌てて戸を閉める。夜の12時だろうが、お構いなしにお客が遊びに来て、いつまでも三味線(しゃみせん)や太鼓の音が賑やかしげに響く。そして1時間もすると、また別のお客が.....。

朝ごはんを食べていて、朝の光を入れようと戸を開けると、茶屋の方は眠るために戸を閉める。陽の高い午後になってから、ようやく「おはよう」と、時間外れの挨拶をされる。

こんなにもハッキリと日常生活の違う処と一緒に住んでいると、人様の生業の様々なことをいやでも教えられてしまう。いってみれば、その差異が分かり過ぎるほどに見えるために、修業の励みにはなるけれど。

ただ、子供たちは、そんな町だから変にマセたりしているのが悲しかった。天気の良い日なんか、お寺の広いお御堂では、茶屋の家の中と違って充分に走り回れるし、夏は夏で涼しいし。

昼間なら、小橋から中の橋付近には魚がたくさん泳いでいたので、近所の子も集まって、よく魚釣りをしてたね。私は殺生は嫌やし、危ないこともあって、よく注意はしてたけど。それに、本当に釣ってはいけない処なもので、警官が来ると、たちまち逃げ隠れしてたけど、そこがまたあの年頃では面白いんやろうね。

けれど夕方からこっち、女の子ならまだしも、男の子は、夜の茶屋商売でお客の目に触れると、商売に影響するもんで、家にも帰らさせてもらうことも出来ないのや。

仕方がないから、お寺はつつい今の保育所みたいになってしまう。運動会も子供会も、雑祭りもお節句も、何んでもかんでもせなならん。もう、元気盛りやから障子なんか張り替える暇がない程に、いつも破られていたわ。

たまに静かやと、「庵主さん、散財遊びしよう」と誘われる。何するんかと思うと、酒を注ぎ合う真似をした後に「あ〜酔っ払った」と言って寝ころむの

やわ。



小さい頃に親を亡くして、寂しさの内にも厳しい尼僧生活をして来ただけに、この子たちの気持に通じ合うものがある。つい、ホロリとして、「さ、尾張町のお菓子屋さんの美味しいのを、お食べ」と、差し出してしまふ。少しでも素直な子に育って欲しいと願いながら。

僧籍に入ってから修業もいろいろあるけれど、考えようによっては、私ほど修業の場に恵まれている者はいないかも知れん。ここでは、人のいろんな生様を好むと好まざるとに関わりなく、四六時中いつも肌身に感じさせられるんやから。

“生きたお経”とは何なのやろう。すぐには悟りを得られるものではないけれど、それに向かう姿勢こそが大事なやろうね。そういえば、尾張町の老舗にしても、ずっと商売を続けていられるのも”いつも飽きずにお客さんのため

を思う”姿勢を持っているからなんやと、聞いたことがある。

“化ける”ことで楽しむ遊びごとなど

年の初めの検番でする新年会は、そりゃもう賑やかなものやった。戦後、使  
い出した今の検番と違って、あのころのは総白木で、回り舞台もあったさかい。  
小橋寄りが一番端にあったもんで、少し主計町から外へ半歩踏み出したような  
気楽さがあっただけに、ちょっとハメを外したりして。

でも、お正月も幕の内は黒留袖を着て、馴染みの客を相手にしての稼ぎ時や  
し。16日を過ぎてても、今度は色留袖姿で、お客さんを楽しませないかん。と、  
なかなか本当の意味で、心の底からユツタリは出来んのがはた目に見えても  
感じられるほどやった。何んといっても、お店にとって正月は書き入れ時で忙  
しかったさかい、女将も芸妓も腰を落ち着けられる訳がない。

やっぱり、本当に楽しめるのは、節分まで待たないかんかったね。四六時中、  
旦那さんというか、お客さんを気にしているのを、ほんの一時でも良い、パー  
ーッと忘れてしもうて、何かいつもと違う自分になるちゅうのかね。

皆んな、それを“化ける”といっぺ楽しんでいたね。日ごろ、いろんな差し  
障りがあっても、この時ばかりは別や。いつもの座敷着を脱ぎ捨てて、叶わぬ  
夢と知りながら、一度はなつてみたい自分の思いの姿の衣装を着て、はしゃぎ  
回る。

ひょっとこの面を被って裾を捲りあげて踊ってみたり、芝居や寸劇の物真似  
をしてみたり。中でも器用な妓は、掛け合いの漫才を即興でしてみたり。驚い  
たり、笑ったり、そして泣いたり。

あのころは、若い妓は島田に濡れ濡れと結び上げて、下手な結婚をするより  
も、いい旦那を持って一流の芸妓になる方が良い、との風潮があっても、本当  
は人妻の丸髷に憧れていたんやね。

ちゃんと結婚して、決まった人との生活を送ることをどんなに夢見ていたん  
やろ。いつまでも若く、いつまでも男さんを楽しませてあげたい\_\_\_\_。けど、  
やっぱりいつかは.....。

粋(すい)な男と女の付き合い。お互いのことを推量しつつおもんばかって、酸いも甘いもかみ締めた上でのお客と芸妓との付き合い。人情の表裏に通じるだけでなく、意気に感じるしゃれた色気とでもいうんかね。そこには“純粹”さとか、“純情”さが漂って来るような。これは案外、お寺という世界での悟りとは違った、生きた世界の真実かも知れん。

70歳の老婆が、舞妓のだらりの帯姿を試みるのも、そんな思いかしら。賑やかさの中に、何故か涙が流れることもあったわ。これも、私自身が、同じ女やったせいやろか。



とにかく、“化けた”姿で、こっちのお座敷、あちらのお座敷、次のお座敷という具合に、あちこちの茶屋をハシゴして回る。お客さんも、即興で羽織を裏返しにして余興をして面白がらせてくれたり。そんな時に、隠れた処に贅沢をする“粋”な裏地模様で驚かされてみたり。

結構、芸妓の自分達も一時を楽しんで、尚その上に祝儀を戴いてと。そやさかい、何か事ある毎に”化ける”ことをしとったね。花見の時なんか、尚更やった。

節分の時はまた、子供達が私と一緒に、茶店を何軒か練り歩くんや。「鬼は外～、福は内～」と豆を撒きながら玄関先で元気一杯の声を出すと、何がしかのものを包んでもらえる。それに一喜一憂しながら、そろそろと狭い道を歩いて、最後は源法院に着くと、今まで小出しにしていた豆の残りを全部、大盤振舞いする。お御堂中が、子供達の楽しそうな歓声で一杯になるのを聞くと、何も考えず心の中が暖ったかくなるようやった。

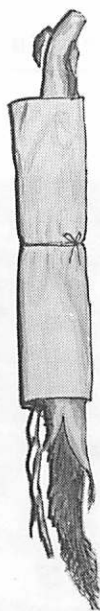
四万六千日 (しまんろくせんにち) と主計町気買



真宗と違って、この寺では法恩講 (ほんご)さんの代わりに、“四万六千日”

を大事にしてたね。というても、女将たちだけでは法恩講さんもしてたようやけど。7月10日の四万六千日が近付くと、壇家さんに寄付してもらった提灯を道の上に吊す仕事から始まる。

人が一人やっと通れるかどうかの狭い道やもんで、浅野川大橋の方からの入り口に渡すようにすると、もう町中が四万六千日の気分になってしまう。女将と一緒に芸妓がお参りに来ると、般若心経を唱えて、半紙に巻いたトウモロコシのお下がりを持って帰ってもらうんや。玄関に吊すと魔除けになるとか、そのフサフサした毛が“儲け”につながるなんていう言い伝えがあるさかい。



お御堂では、そんなこんなしながらも、数少ない大事な壇家さんが来られると、早速2階に上がってもらったわ。そして、御膳を出して、般若湯(はんにゃとう=お酒)を飲んでもらうんや。ただ、律儀な方ばっかしやもんで、大騒ぎすることもなく、さわやかな感じのお祭り風情やったね。



盛大やいうても、元々は、観音千日詣りから四万六千日詣りになっただけに、この寺と比べて川向こうの観音院は、名前通りさすがに盛大やった。あそこは、お殿様の時代には、能楽までやっていた由緒ある寺やから、無理もないことや。

けど、この日に参詣すれば四万六千日の日参をしたのと同じ功德になるというのは、なかなか自分の時間を取り難いこの町の女衆にはありがたいことなんやろね。人と生まれて、必ずこころの奥底で、神仏に対しての敬意と縋(すが)る気持を持つとるはずなんやさかい。女町から無理して外へ出て、川向こうへ行かなくても、自分の行ける範囲の処へ行つて、手を合わせれば良いということなんやろ。

肝心なのは、“こころ持ち”なんや。一升到四万六千粒の米粒があるさかい、一生という意味になるとか。この一日に全部のことが含まれるのは、味わい深く、情に響いて来させられる。

都都逸(どどいつ)の1つに「うきな(浮き名)“なが(流)れ”た、あさの(浅野)のかわ(川)で、ぬし(主=お客さん)をまつ(待つ=松)まち(花街)、かずえまち(指折り数えて待つ=主計町)」と、言われるほどに主計町の女衆は、情が深いんや。用水やら浅野川、それに雨の多い空模様が、却つて“みずみず(水々)しい”しっとりとした味わいを醸し出すんかね。

この町に通つて来るお客さんも、そんな風情が好きな方ばかりが来るようや。賑やかだ賑やかだといつても、お馴染みさんばかりやもんで、そこはかたない品格が漂うみたいやった。

川向こうの茶屋街は、お金持の人が派手に接待する処やったし。石坂の茶屋街は、ぐっと砕けた庶民の遊ぶ処という感じやった。

その点、この町はお客自身が、常磐津にしろ、清元にしろ、歌沢にしろ、ちょっとした芸域の広い人が多かつたし。サラリと一枚、着物を替えて、粋(すい)と意気の狭間で遊ぶ姿は、どちらが芸人か分からんくらいやったわ。まあ、仕事を一所懸命に頑張る分だけ、趣味の芸にも磨きが掛かるんかね。

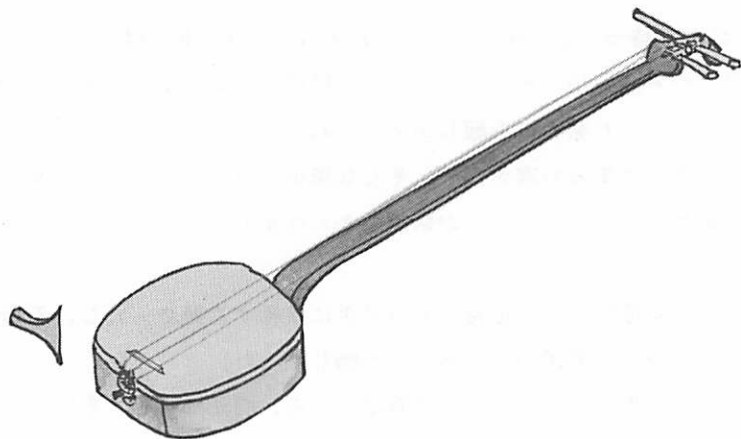
そやさかい、芸妓の方もおちおちしてられん。お馴染みさんに、自分達の本職の芸を超えられるようなことが、万が一にもあつたらいかんと勵みにもなる。

自然、気骨のあるおかみや芸妓が、名物になるというんか。

托鉢の敲しきの中に三味線の音色を聞いて

昼は、それぞれの店の定紋を染め出した、ほとんどが無地紺ののれんを吊しているけど、夕暮れから宵の口ともなると、「〇〇や」とかの家名を書いた角行灯(かくあんどん)に明かりが灯る。やがて耽る夜を待ちながら、木虫籠(きむすこ=はめ込み式の連子格子)の中も何んとなくざわめいて来始めるんや。

そうしてポロリッ、としたような一時。音合わせの三味線がジャンと鳴ったり、「松には～」と端唄の声が流れてはすぐ尻つぼみに止んだり、妙に艶っぽい感じがして来るようで。



季節の良いころなら、そんなに気にもならないんやけど、寒い小雪の舞うようなころの托鉢から帰りがけ、あまりの世界の違いに、ふと心が向きかかる。

世俗の因縁を断ち切り、自分に限りなく厳しさを与えることに慣れているものの、不思議な気持ちにさせられるよう。

表通りの商人のように、額に汗して働く訳ではないけれども、私は私なりに“ここに汗して”日々の修業をしているつもり。何んといっても一昔前までは、泣く子に「尼寺へやるぞ!」と言うと、びたっと泣き止んだ位に厳しい処やっただし。縁あって尼僧になった私には、尚更、今日のままに満足する甘さを捨て、じっと耐え忍ぶことがほとんど全てやった。

托鉢は、金沢だけでなく、随分と遠い処まで出掛けた。勿論、天候にかかわりなく歩いて回り、人のところに手を合わす気持ちでお経をあげ、ところの響きに託すだけ。軒先に立つと邪魔だといわんばかりに、お金を投げ付けられるようにされたりすると、却って丁寧に お経を唱えながら、自分を一所懸命に勵ましていたこともあったわ。

手足の先まで冷たくなりながらお寺に帰り、隠居さんに「ただいま帰りました」と挨拶する。法衣や笠を外し、ずり寄るようにしてこたつに入っても、正座したままではほとんど暖ったまらないのや。仕方ないから、「おやすみなさい」と言って、冷たい布団の中に冷えた体を入れて、じっと我慢する毎日。

楽しみとは何んなのやろう。ふと、思いよんどんでみたり。

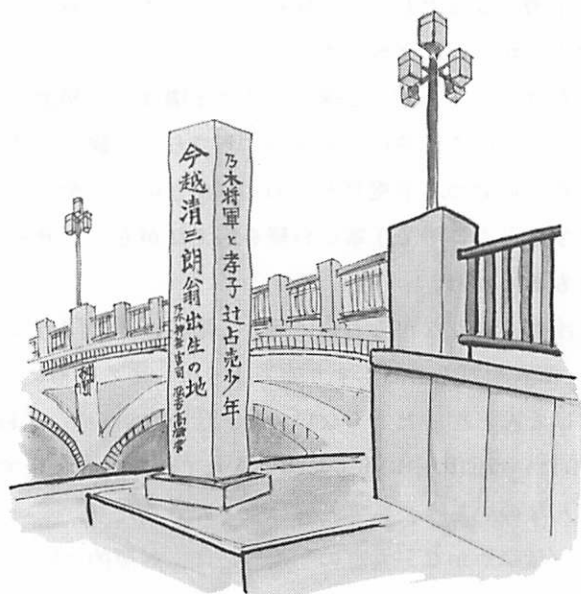
そんだけに、一見華やかな“女町の”賑わいは、対照的に映り広がって来るんや。何という有様かしら!と思う内は、まだまだ修業が足らんかったんやね。それは表に現れる形が少し違うだけで、同じような意味で汗して一所懸命に頑張りが、自分達の生きる場所をこの処に定めて、休まずに続ける稽古の厳しきの中から“芸”を磨いているのやった。

人それぞれの顔のように、人それぞれに定められた生き方があり、それぞれに汗している。尼僧も、芸妓も、商人も……。

#### 尾張町の賑わいと旦那衆

私の来たところは、お城の中には陸軍第九師団司令部があって、朝や昼、そして夜などになると、ラッパの鳴るのがここまで聞こえて来て、何をしても

時間が分かったわ。もっと前の大正のころは、大砲をドンッと打っていたそうやけど。何といっても、その日の区切りというのかしら、気持が整理されて、ぐずついたころづもりを次へ移し易かったもの。



休みの日には、兵隊さんが日ごろの厳しい顔付きと違って、ニコニコと晴れやかにして尾張町からこっちへ流れて来るんや。時折、道端で偉そうな軍人さんに会ると、気をつけ！と敬礼してたり。また、そんな兵隊さんに会うために、遠くから身内の人が面会に来て、いそいそと奥さんらしい人が後ろにそっと歩いていたりするのは、何かしら暖ったかいものを感じさせられたわ。

今町には、そんな人に泊まってもらう旅館が並んでいたし。尾張町は引きも切らぬ買い物客が大店の間口いっぱい賑わっていたし。新町は新町で職人さんや粹人が住んでいたし。兎に角、人がいつも何処かに歩いていたね。

お陰で主計町も繁盛し、女将たちの書く、盆と暮れの半年毎の請求書の金額

も増える一方やってみたい。あのころは、今と違って巻紙に筆文字でさらさらっと書いていたもので、巻紙がだんだん太くなるというんかね。日ごろの手慣れた精進かしら、皆んな字が奇麗で趣きがあったわ。

戦後、その軍隊が無くなると、町に兵隊さんを見掛けんようになったのは仕方がないとしても、耳に馴染んだ音が聞けんようになって、何かところに穴があいたみたいやった。出征する兵隊さんに面会に来る人たちも、潮を引いたように消え去ってしもうた。

私にすれば、ようやくの静けさでも、主計町や表通りの尾張町の老舗は、お客さんが少なくなって大変やったことと思う。いくら、大口のお客さんを相手にしているととっても、店先に来る人の流れが序々に変わって行っただし。

何より、検番に力が無くなって、せっかくの白木の建物も壊されてしまったのは勿体ないことやった。今使っている検番は、前の検番の代わりに大きめの茶屋を買取ったもので、回り舞台もないし、簡単なものになってしもうたわ。素朴なことが、また良いこともあるんやけど。

ただ、このお寺は、場所が場所だけに、代々住み着いている壇家がほとんどなく、これまで検番からのお金で賄って来ただけに、引き締めんといかんようになったね。

ただ、やっぱり尾張町の旦那さんや。お客さん相手のことをしているだけに、「お陰さんで」と頭を下げて感謝する気持から信仰心を厚く持っているんやね。商売が厳しくなっても、壇家総代として、何くれと面倒を見てもらったのはありがたいことやった。ある総代の旦那さんなんか、弘法大師の“弘”の字を息子の名前に付け、「人間、感謝の気持を忘れたらいかん」とまで、言われてたし。

### 浅野川の大氾濫に合って

森の都・金沢といわれるけど、ここはどっちかというとな水の都の方が当たってるようや。浅野川に犀川やろ、それにお殿様の時代に造られた辰巳用水、鞍月用水、大野庄用水やら何やらかんやら用水とかの水路が一杯あるし。

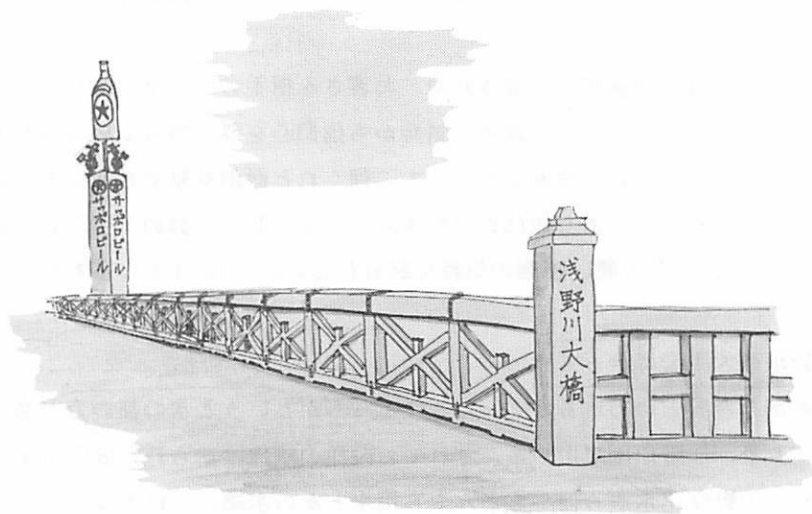
この主計町にも、尾山神社から始まって近江町をかすめ、仏眼寺から入って

くる西内惣構堀が中の橋の付近に。また、兼六園下から始まって味噌蔵町、九人橋を經由して、尾張町里程元標横の枯木橋から新橋をくぐって来る東内惣構堀が浅野川大橋付近に。と、二本も水路があるんや。惜しいことに、ほとんどが今では使われとらんもんで、暗渠になってしまおうて、普段はあんまり分からんがになってしまおうとる。

まあ、水がたくさんあって美しいから、お酒も美味しくて、奇麗な女の人も多いんかね。

そんな川は水の流れに時を刻むもの。ゆっくりと流れたり速く流れたり、また少しずつだったり多かったり。友禅流しをした浅野川も、いくら絹々川やか女川といわれていても、やっぱり洪水の時もある。

文政三年(1820)の折には、浅野川大橋も犀川大橋も洪水で流されてしまおうたりしたこともあったという。あのころは、架け替え費用は尾張町などの商人町で負担していたとか。



浅野川大橋が轟(とどろき)の橋なんて伝えられてたというても、何の意味やったのか今では誰に聞いても知らんがになってしもうた。新しく架けては洪水で流されるのを繰り返しているうちに、由来が忘れられてしもうたんかね。

大正12年にはコンクリート造りになったものの、それまで木製の欄干に立っていた愛嬌たっぷりのビール会社かどこかの木彫人形も無くなってしもうたとか。もう川が洪水になっても大丈夫やという安心を皆んなは持てたやろうけど、惜しいことやと思うとった。

ところが、百万石まつりが初めて賑やかに行われた年(昭和27年)やった。忘れもせん、昔お殿様が江戸の將軍様へ冬のうちから氷室(ひむろ)に保管していた雪氷を夏に献げたのにちなんで、無病息災を願って白山の雪のように白い氷室まんじゅうを食べたりしていた、あの氷室の日(7月1日)に。前の晩から降り続いた大雨が、浅野川を大氾濫にさせてしもうたのや。

中の橋も小橋も流されてしもうたし。この高台にあるはずのお寺の、すぐそこまで水が押し寄せて来たほどで。勿論、茶屋はほとんど皆んな水の中に漬かってしもうて大変やった。

こんな時、女ばかりの町というのは、どうしようもないもんやった。力仕事が出来ないもんで、着のみ着のままの、びしょ濡れの姿でお御堂に避難して来るのが精一杯。どンドン水に流されるのを、ただもう手をこまねいて眺めて騒ぐだけやったさかい。

それでも、川の水が一段落してから、ふと見ると、男の人が何人か出て来ているんや。着物の裾を捲り上げて、水を掻き出したり、物を運んだり。でも、その仕種が何んとなく危なっかしいというか、手慣れていないというんか。

後で女将達に聞いてみたら、蟲尻筋の旦那さんが自らお出まし下さった姿とか。道理で、日ごろ重い物を奉公人に持たせてばかりで、体を鍛えてないから仕方ないか。店では、突然旦那さんが消えてしまい、さぞどこへ行ったか探しているやろうかなと思うと、くすっと可愛しくなった。

でも、どんなことにせよ、自分が世話になった人が難儀に合えば、それを恩義に感じて機会ある時にお返しする。という姿勢は、やっぱり商人の基本に流

れるものなのかね。見直しさせられたわ。

ただ、せっかく一段落したのに、翌年の8月になると、また大洪水になり、架け替えたばかりの中の橋も小橋もその他の橋と一緒に流されてしまった。お役所は、木造の橋では何回直しても駄目やいうて、鉄筋に造り直し出したのはいいんやけど、あまり使っていないからと中の橋を廃止にされたんは、もったいなかったし。おまけに、堤防を高くかさ上げしてしまい、せっかくの川のある情緒が見えなくなったことは、悔やんでも悔やみきれなかったわ。

今でも、茶屋の押し入れの中の壁とか、外からあんまり見えん処には、当時の水位の跡が残っているけど。

### 伝統芸能を伝え残す町として

時代が変わり、カタカナの文字がいつの間にか溢れる中で、ゆっくりとこの町に通って来る人も減ってしまってた。静かになったのは、そりゃお寺としては良いことかも知れんけど、町としてはどうなのやろ。

頑くなに、昔のままの生き方を守り続けることが当たり前やと思うとった。ちょっと艶っぽすぎるところもあるけど、お姉さんを立て、お客さんに大事にする。そんなことが、珍しいと言われて響いて来るなんて、考えたこともなかった。

人様のことを気遣う風潮というもんも、だんだん薄れて来ているんかね。淋しい限りや。町並も、1軒、また1軒と女将が店を閉じ、旦那が去り、昔からの顔馴染みも随分と少なくなってしまってたわ。

でも、こころを込めた“しぐさ”とか、芸事に対する“こころ意気”は、まだまだしっかりと残っている。

飽きずに毎日を精根込めて稽古して、自分のために芸を磨く\_\_\_\_。

これは毎日、“手まめ足まめ”して、“飽きず”に“商い”する\_\_\_\_。

ことに通じるんかね。

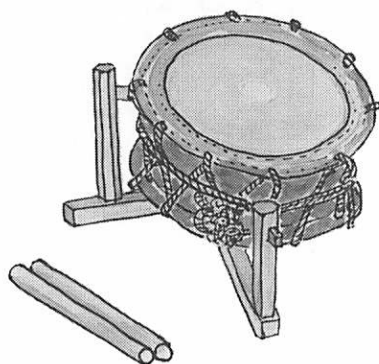
先だってから、この界隈の景観を守るために、お役所がいろいろな整備をしてくれ出している。道路を奇麗にして、電柱を無くし、堤防の高いのを見栄え



良くするとか。一文橋だった”中の橋”も、木造りのような形にして新しく架けられたし。

おまけに、お寺の前の家が空き家になって取り壊されたお陰で、浅野川までの見通しが良くなり、急に明るくなって、ここへの参道になったみたい。やっと、お寺も陽の目を見て、参拝者の人が増えないかしらと、塞銭勘定をしたのも束の間。お役所で、何やら回りに合わせた、それらしい建物を築るんやて。ちょっと惜しい気になるわ。

とはいうても風情が、確かに情緒あるものになって来たことはありがたいわ。どこにでもある、似たような町並というのは、ちょっと見には恰好が良いけれど、あんなに味気なく、落ち着かない、つまらない処はないさかい。「.....らしい」ということは、そんだけ、今では貴重になっているんや。

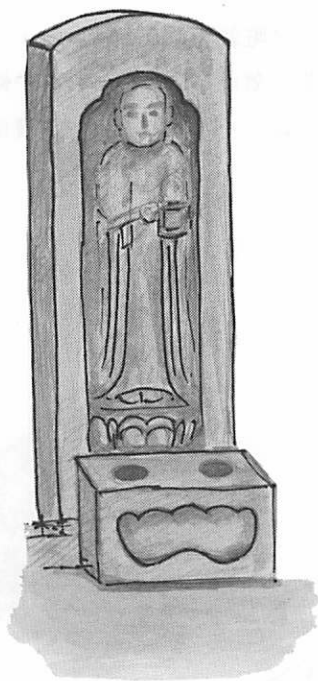


でも、一番大切なのは、主計町気質を忘れないことかね。女町に生きてると

いう特別な味わいの中で、兎にも角にも芸一筋に粋に徹して来た姿を見ながら、私も他のお寺では考えられない修業をさせてもらった。

金沢市でも、伝統芸能伝習者補助なんて制度を設けて、ようやく形ばかりのモノよりも、形に見えないモノの価値に目をつけてくれ出している。

これからも、形だけはどんどん変わって行くことだと思うけど、変わらないものの中にこそ、忘れていけないものがあるのかしら.....。



南祐法・鑑(おうな)について

明治四十年二月二十二日生。昭和三年に代々の男住職に替わり、源法院に入る。主計町茶屋街という女の世界の中で、庵主として人々の心の拠り所の役割を果たしながら、表通り尾張町の商業を見守る。

あとがき

竹に雀は品良くとまる

とめてとまらぬ色の道

ソジャソジャソジャ、とめてとまらぬ色の道

かいな、かいな、かいな、かいな、真実かいな

うわの空ではないかいな

ソジャソジャソジャ、うわの空ではないかいな

カイナカイナ

【オ～ヤ、ドンドン<大太鼓>ツクツク<小太鼓>、ドン<大太鼓>

オ～ヤ、ドンドンツクツク、ドン

オ～ヤ、ドンツク、ドンツク、ドンツクツツ

ハッ、ドーツク、ドンツクツツ

ドンドンツクツク、ドン】

お次ぎは四丁目

【ヨ～イ、ドドドン、ドン、ドドン、ドン

オ～ヤ、ドンツクツツツ、ドンツクツツツ、ドンツクツツツ、ドン

オ～ヤ、ドンツクツツツ、トコトコトット、ドーツク、ドン

オ～ヤ、ドンツクツツツ、ドン

オ～ヤ、ドンツクツツツ、トコトコトット、ドーツク、ドン(二回)

オ～ヤ、ドンツクツツツ、ドンツクツツツ、ドンツクツツツ、ドン(二回)

オ～ヤ、ドンツクツツツ、トコトコトット、ドーツク、ドン(二回)

オ～ヤ、ドンツクツツツ、ドン

オ～ヤ、ドンツクツツツ、ドン

オ～ヤ、ドンツクツツツ、ドンツクツツツ、ドンツクツツツ、ドン、ドン】

お終まいは八丁目

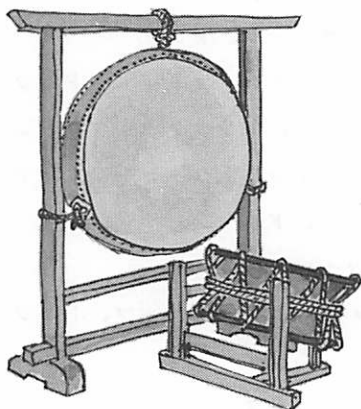
【ヨ～イ、ドンドーン、ドンツクツ

ヨ～イ、ドンドーン、ドンツクツツツ、ドーツク、ドンツクツ

ドン、ドン、ドン、ドン、ドンツクツ  
ドコ、ドコ、ドコ、ドコ、ドンツクツ  
ドンツク、ドンツク、ドンツクツツツ  
ドーツク、ドンツクツ、トコトコトット、ドン、ドン  
ドンツク、ドンツク、ドンツクツツツ  
ドンドンツクツク、ドン、ドン.....」

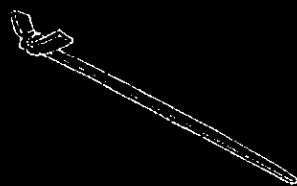
お座敷太鼓の音色を聞きながら、女町の中で修業された庵主さんの意気込みと、商人町の商いへの“ころ意気(粋)”を、たっぷりと感じ取られました。例え、表に現れる姿が多少違って、基本は同じだということをつくづく知らされました。庵主さん、これからはますますお元気で、良い話をありがとうございました。

忘れてはならないことを、お福分けして戴いたことに改めて感謝すると共に、これからは尾張町商店街を宜しくお引き立ての程、お願い申し上げます。



《《 さし絵の説明 》》

項	目	内 容
○表紙		「板屋根に石を置いた昔の町並」
<目次>		
○初めて主計町に来たころ		「旧主計町の石碑と浅野川大橋」
○船着き場としての母衣町界限		「浅野川を上る荷を積んだ川船」
○          〃		「梅鉢の線香立と仏さん」
○家並の作りと女将たち		「機能的に鏡台等を置いた茶屋 の室内」
○子供たちの遊び場となりながら		「鉢子とおチョコ」
○“化ける”ことで楽しむ遊びごとなど		「仮装をして化けた芸妓たち」
○四万六千日と主計町気質		「四万六千日の提灯」
○          〃		「毛足の長いトウモロコシ」
○托鉢の厳しさの中に三味線の音色を聞いて		「三味線」
○尾張町の賑わいと旦那衆		「乃木將軍と孝子辻占売少年の 石碑」
○浅野川の大氾濫に合って		「浅野川大橋とビール広告塔」
○伝統芸能を伝え残す町として		「お座敷太鼓の小太鼓」
○          〃		「お地藏さん」
○あとがき		「お座敷太鼓の大小太鼓」
○裏表紙		「かんざし」



発行 = 1993年4月吉日

著者 = 石野 瑠一

さし絵 = 村上 隆

発行所 = 金沢市尾張町1丁目11番8号

尾張町商店街振興組合

尾張町若手会